CP25-5329·30

The BEATLES

THE BEATLES"

This band score features the 29 songs from the original Beatles CD "THE BEATLES"
BACK IN THE U.S.R. DEAR PRUDENCE GLASS ONION OB-LA-DI, OB-LA-DA
WILD HONEY PIE THE CONTINUING STORY OF BUNGALOW BILL

WHILE MY GUITAR GENTLY WEEPS/

HAPPINESS IS A WARM GUN/MARTHA MY DEAR/I'M SO TIRED/BLACKBIRD/PIGGIES/ROCKY RACCOON/DON'T PASS ME BY/WHY DON'T WE DO IT IN THE ROAD/I WILL/JULIA/BIRTHDAY/YER BLUES/MOTHER NATURE'S SON/

EVERYBODY'S GOT SOMETHING TO HIDE EXCEPT ME AND MY MONKEY

SEXY SADIE HELTER SKELTER LONG LONG LONG REVOLUTION NO.1 HONEY PIE SAVOY TRUFFLE CRY BABY CRY GOOD NIGHT

Guinko Music Pub.co.,LTD.



BACK IN THE U.S.S.R./バック・イン・ザ・U.S.S.R. 4

DEAR PRUDENCE/ディア・ブルーデンス 11

GLASS ONION/グラス・オニオン 18

OB-LA-DI, OB-LA-DA/AT. D. Fr., AT. D. F.

WILD HONEY PIE/DYNK·ハニー・パイ 27

THE CONTINUING STORY OF BUNGALOW BILL/コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル 30

WHILE MY GUITAR GENTLY WEEPS/ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス 34

HAPPINESS IS A WARM GUN/ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン 43

MARTHA MY DEAR/マーサ・マイ・ティア 49

I'M SO TIRED/アイム・ソー・タイアード 54

BLACKBIRD/ブラックバード 57

PIGGIES/ビッギース 61

ROCKY RACCOON/ロッキー・ラックーン 65

DON'T PASS ME BY/ドント・バス・ミー・バイ 71

WHY DON'T WE DO IT IN THE ROAD/ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード 77

| WILL/アイ・ウィル 80

JULIA/ジュリア 84

BIRTHDAY/バーステー 87

YER BLUES/ヤー・ブルース 93

MOTHER NATURE'S SON/マザー・ネイチャーズ・サン 100

EVERYBODY'S GOT SOMETHING TO HIDE

EXCEPT ME AND MY MONKEY/エヴリボティース・ゴット・サムシングトゥ・ハイド・エクセプト・ミー・アンド・マイ・モンキー 103

SEXY SADIE/セクシー・セティー 107

HELTER SKELTER/ NV9-1-77V9- 111

LONG LONG LONG/ロング・ロング・ロング 119

REVOLUTION NO.1/レボリューション 1 123

HONEY PIE/N=--/17 130

SAVOY TRUFFLE/サポイ・トラッフル 137

CRY BABY CRY/クライ・ベイビー・クライ 143

GOOD NIGHT/グッド・ナイト 147

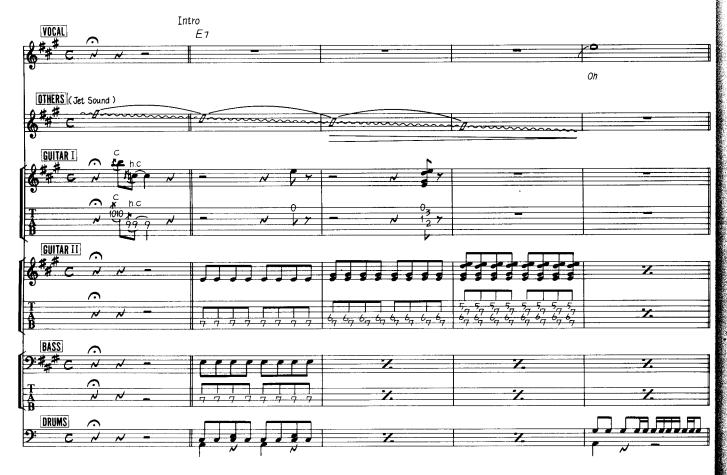
BACK IN THE U.S.S.R.

バック・イン・サ・U.S.S.A.

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

トップを飾るのは、ノリのいいロックン・ロール・ナンバー。この曲のリード・ギターはポールが弾いている。 〇の 9 小節目からは、ギターはオクターブ・ユニゾン。 ハンマリング・オンのタイミングをうまく合わせないと 1 つに聴こえない。といっても現在ではハーモナイザーを使用して 1 本で代用できるわけだ。 間奏はチョーキングを使ったメロディに準じたフレーズ。 ポールはチョーキングが好きなようで、出てくる度合いが高い。 粘っこいフレーズが身上だ。特に〇の 5 小節目からは cho & Dの連続で、息の抜けない展開となっている。 リズムは 8 分音符 3 つでワン・パターンとなっている。 ベースはポールがギターをプレイしているので、ジョンとジョージが弾いている。 音色はファズ・ベースに近いもので、あまりフレーズが浮き立っていない。 〇の 2 小節目のようにスライド、プリング・オフを使った細かいリフが出て

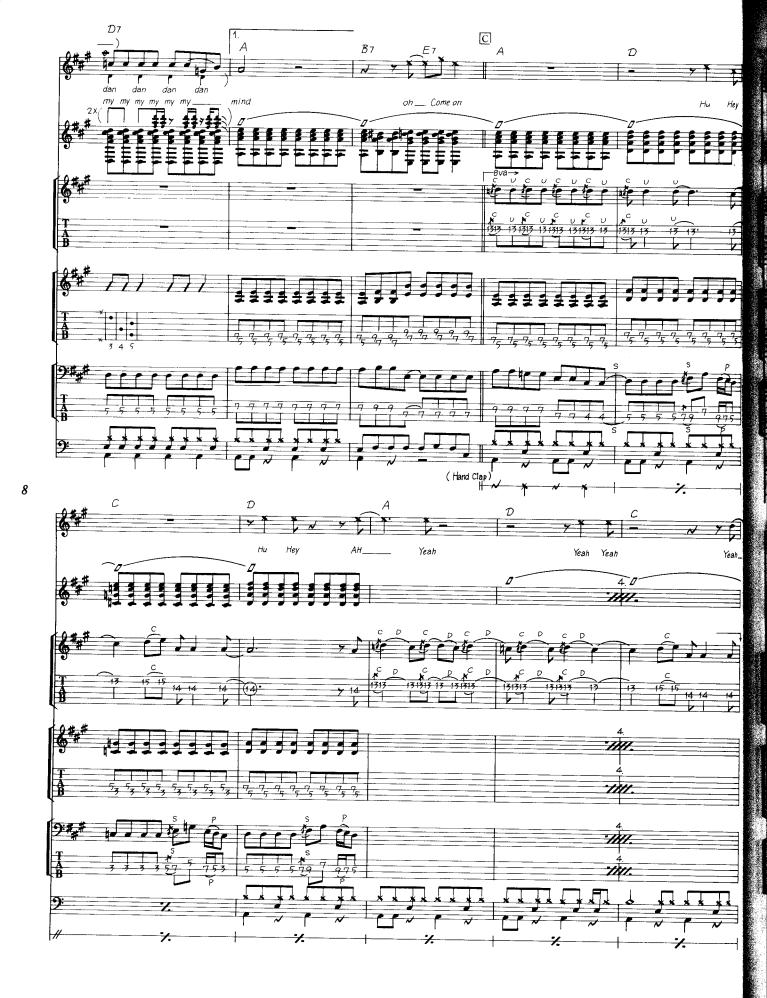
くる。やはりギタリストから見たベースのとらえ方だと思う。コーダ・マークの3小節目、コードはB,→E,と変わっているが、ここはA音でステイしている。ピアノはかなりラフに弾いていて、16分音符のリフは右手のコードと左手のベース音を交互に弾くとよい。ベース音はへ音記号で書けなかったので、譜面の1オクターブ下と思って結構だ。この曲ではジェット音がかなり登場するが、もし入れられるなら、4小節ぐらいのサスティンをきかせ、SP×90等のオートパンを使用し、ステレオで出すと、効果は大きい。イントロ、エンディングではぜひ使いたい。コーラスはモロにビーチ・ボーイズ・サウンド。低音と高音のミックス・コーラスだ。高音部のファルセットは、きちんとやってもらいたい。ドラムスはブレイク以外はスネアの2拍、4拍が二重録音されている。

















DEAR PRUDENCE

ディア・ブルーデンス

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

女優のミア・ファーローの妹、プルーデンスをモデルに書いたナンバー。イントロとエンディングのギターIIが印象的。ここのアルペジオは押さえ方は難しくないのだが、右手のピッキングにくせがあるので反復練習が必要である。とくに1拍目が5弦開放から出るので注意。このギターIIとIIIは6弦開放はDにチューニングされていて、タブ譜もそれに合わせてある。6弦をDに落とした時は、アルペジオであまり強くピッキングすると、弦の振幅が大きくなり、音がゆれてしまうので気を付けたい。回からはギターIVが登場し、オクターブ・ユニゾンでダビングされている。現在ではハーモナイザーの使用により、1本のギターで代用できる。回の3小節目3拍目にスライドが出てくるが、これは大事に弾きたい。その後のチョーキングも粘っこく。回、回のギターは























グラス・オニオン

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ビートルズの曲名を歌詞の中に織り込んだビートルズのヒストリー・ソング。コード・バッキングはギターIIの12弦アコースティック・ギターが中心。ギターIは、リズム・バッキング。ハイ・ポジションがあるので、左手をキッチリ押さえてピッキングしよう。リズムは2×だけちよっと変化をつけていて、あとは同じ。ベースはリッケンバッカーの音が強く出されている。いくらピック弾きとはいえ、このサウンドを出すのは難しい。ミドルをカットし、トレブルとベースを上げると似た感じは得られる。8分休符をうまく使ったフレーズでリズムは重たく出す事を念頭にプレイしよう。ドラムスは囚にスネアの位置が面白いところがあるが、ほぼオーソドックスな8ビートだ。イントロ、その他にスネアのフラム打ちが出てくるが、普通のフラムより間隔は長い。©の10小節目などは月7月7に近いリズムである。D.S.後の囚の4小節

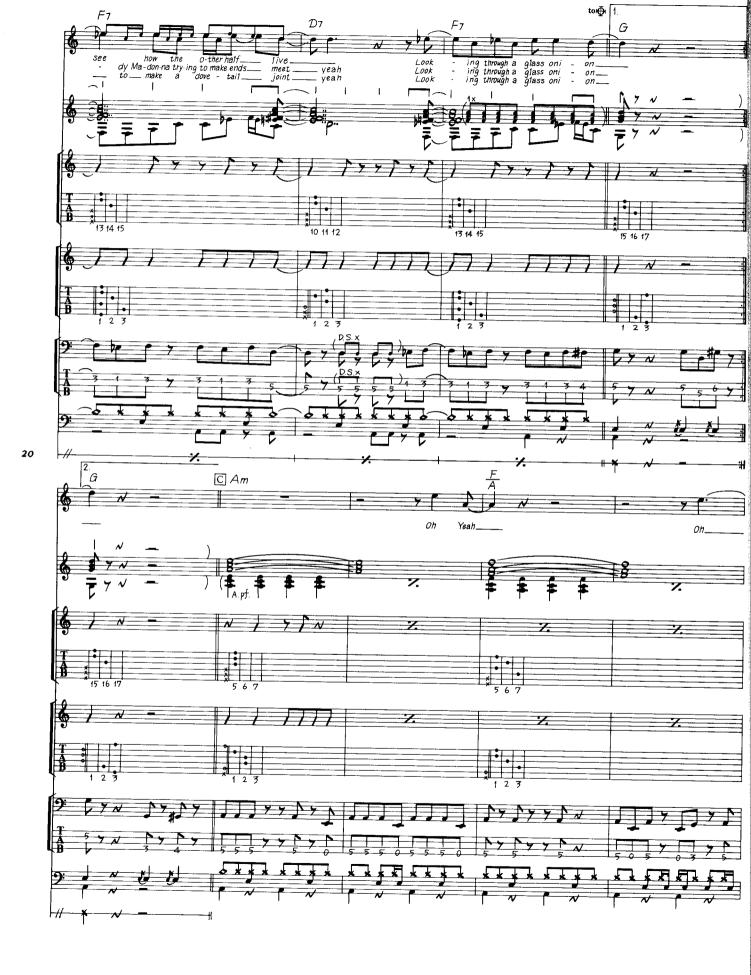
目から出てくるのはポールの吹くたて笛。こういう所にイギリのバンドらしさが出てくる。図のストリングスはコード・ハーニーをアンサンブルでとらえ、コントラバスがロー・パートをいて、アクティブなニュアンスを出している。図はストリングスだけの部分で、ハーモニーがセブンス音を強調して不気味な感を出している。図の1×はちょっと書ききれなかったが、コントラバスがあまり動かず、コードのルート音をパッシングを加えて追う展開になっている。ピアノは図、図とはいっているが、コードを補佐する形。1カッコ、2カッコでブレイクする時、他の発出とりちょっと長く伸ばしていて、その存在をアピールしているこの曲は演奏は簡単だが、ストリングスをいかに表現するかが、キー・ポイントとなっている。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only











Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

この作品の中で最もポピュラーな曲の1つ。楽しい雰囲気がよく現れている。ギターとピアノで8分裏のリズムを強調し、レゲエ調の曲に仕上がっている。ピアノはポールが弾いていて、バッキングに徹しながらも、いいフレーズをちりばめている。イントロ前のピアノ・ソロや、D.S.2後の囚の4、6小節など、これを抜いたら曲が成立しないほどウェイトの高いフレーズがある。ギターもリズム中心のサイド・ワークだが、囚と目ではパターンを変えており、工夫の跡がうかがえる。ピアノとのリズムのからみが興味深いものとなっている。さてこの曲のメインとなっているのがベースだ。単純なパターンのくり返しだが、実際ポールのようなうねりを出すのは難しい。2、4拍目の音へのグリスが決め手となろう。なお、よく聴いてみると、囚、回ではベースがオク

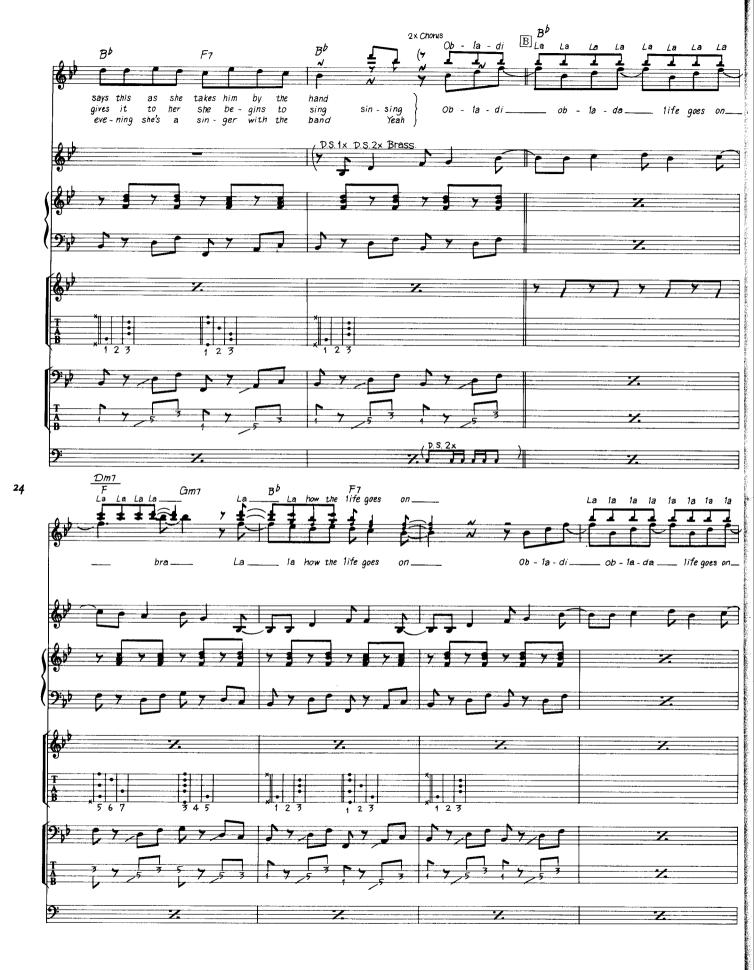
ターブ・ユニゾンされている。つまりこの表記音の1オクターブ上の音がダビングされているわけだ。ビートルズはギター・リフのオクターブ・ユニゾンを得意のパターンとしていたが、ついにベースに及ぶとは…。こういう事ができるようになったのも、録音状況が良くなった事も要因の1つだ。イントロを聴くと、1オクターブ高い音域からはいって、3小節目から低パートもはいってくるのがよくわかる。ドッシリと重厚感のあるフレーズに聴こえる訳は、こんなところにあったのだ。ドラムスは国の4小節目にあるようにフロア・タムだけダビングしている。コーラスとブラス・セクションも重要なサウンドとなっている。楽しげなS.E. (笑い声、パーカション) などもできるだけ書いておいたので参考にしてほしい。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only















WILD HONEY PIE

ワイルド・ハニー・バイ

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

こんなお遊び的な曲ができるのもトータルなアルバム作りができるからこそである。演奏の方はポールのワンマン・バンド・プレイ。とぼけた味がよく出ている。ボーカルは真ん中のパートだけ普通の声で歌っているがハイ・パートとロー・パートはビブラートを大げさにかけて歌っている。特にハイ・パートは、ファルセットではあるが強力に出していい。最後の小節は今まで3パートのハーモニーをつけていたのが、バラバラに動き出しフェイクした感じを出している。ギターIは12弦アコースティック・ギターで弾いている。大きく分けるとコード・ストローク部分とアルベジオ部分とに分けられる。押さえ方も難しくないので、アルペジオもしっかりピッキングしてほしい。ギターIIは音域的にIよりも1ポジション高いところで弾いている。奏法は、スライド・

バーを用いて、それを小刻みにビブラートをかけながらフレーズを弾くと、このようにフニャフニャしたニュアンスが出てくる。スライド・バーを用いるために、1~3弦をオープンF*・チューニングにしている。すなわち1弦をE(変わらず)、2弦をA*(半音下げ)、3弦をF*(半音下げ)としているのである。これで13フレットを弾けばGr、11フレットでFrとなるわけだ。コードがセブンス・コードしか出てこないので、コード・トーンのセブンスの音を1弦にもってくれば、すぐこのポジションでコード・ハーモニーが得られるわけだ。タブ譜もこのチューニングをもとに書いてある。ドラムスはバス・ドラムをずっと4拍で刻み、その上のポジションはアコースティック・ギターのボディを叩き、エコーを深くかけた音。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only









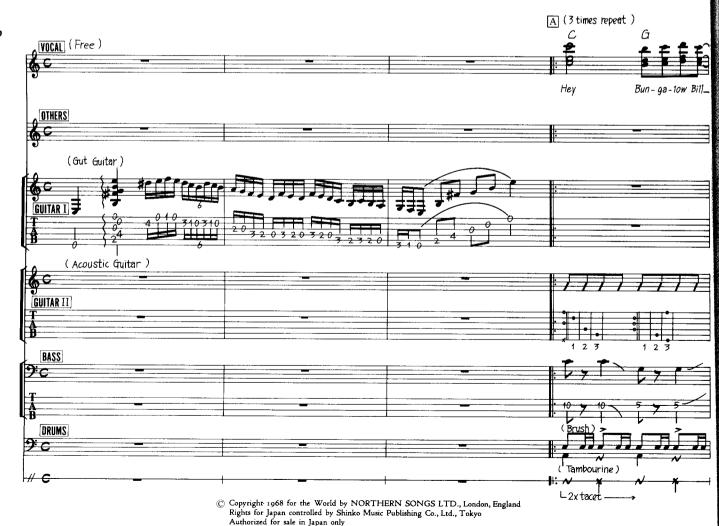
THE CONTINUING STORY OF BUNGALOW BILL

コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル

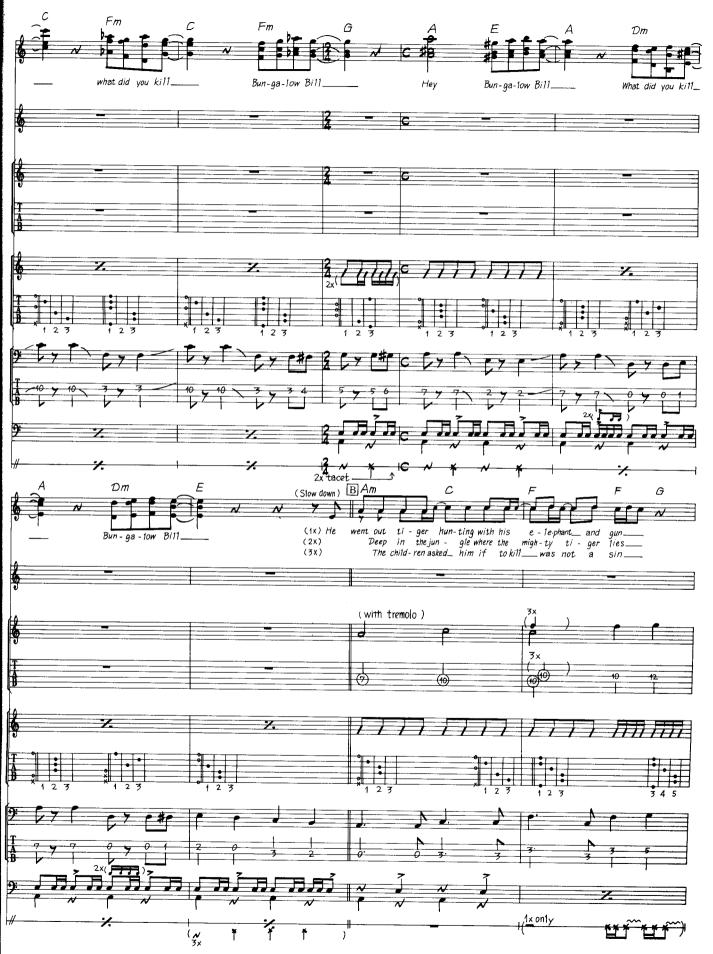
Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ルイス・キャロルの童話を思わせるノベルティ・ソング。3コーラス目に出てくる女性の声はヨーコ。 回前のギターはスパニッシュ・ギターのテクニック。3小節目のギターは1小節目のダイアグラムを参考にするように。 図のギター I はマンドリンのトレモロ奏法に近いものである。かなりハイポジションまでいくので、的確にしかも速度を落とさないでピッキングしなければならない。ベースはこの曲でも印象的なリフを弾いている。 回の部分がそうだ。 ほとんどが2弦においてのプレイで、各ルート音までをグリスでつないでいる。 例外は6、7小節目で2弦開放を弾いているからグリスはできない。1、3拍目をスタカート気味に弾くのが粘りの出るグリスと対照的になっていい。 図の6小節目のA→Fへのパッシングもグッド。この曲に関してはアドリブがまったく

なく、1曲が1つのパターンでできているといってもよい。ドラムスはブラシでプレイされている。アクセントの入れ方を微妙に変化させて、フィル・インに近づけている。ここではタンパリンも重要な位置を占めている。②の2×からはブリガイン2(全)に変わるが、その立役者がタンパリン。後半の盛り上がりに大いて役立っている。②のボーカルは、譜面に書いてある3声をメインに、フェイクしたラインを混ぜて大勢で歌っている感じを出そう②から登場して②ではソロをとっているオルガンは、コンボ・オルガンで、トロンボーンのサウンド。②からはシャッフルになるという芸の細かさはさすがだ。ビートルズの楽しい雰囲気作りがよく出ている曲である。













34

WHILE MY GUITAR GENTLY WEEPS

ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス

Words & Music by George Harrison

 してほしい。音色はレスリー・トーンで、コーラスのスピードを上げ、デプスを中ぐらいにするとよい。ベースはダブル・ノート奏法を大胆に取り入れたプレイだ。リッケンバッカーのトレブリーな音色があってこそである。1度5度の和音ではルート音が弱くならないようにピッキングすること。図の4小節目の2×のFはミス。②はメロディアスなプレイで、よく見ると1、3小節目のフレーズは下へのカーブ。2、4小節目は上へのカーブとよく考えられている。ドラムスはシンプルなパターンに徹すること。ノリはスネアの位置(3拍目)を見ればわかるように16ビート優覚。1、2拍目のバス・ドラムが気を抜くとハシリがちになるので注意。オルガンはジョンが弾いていて、②の美しいコード進行をうまく表現している。



© 1968, 1981 by HARRISONGS LTD.

Assigned for Japan to TAIYO MUSIC, INC.

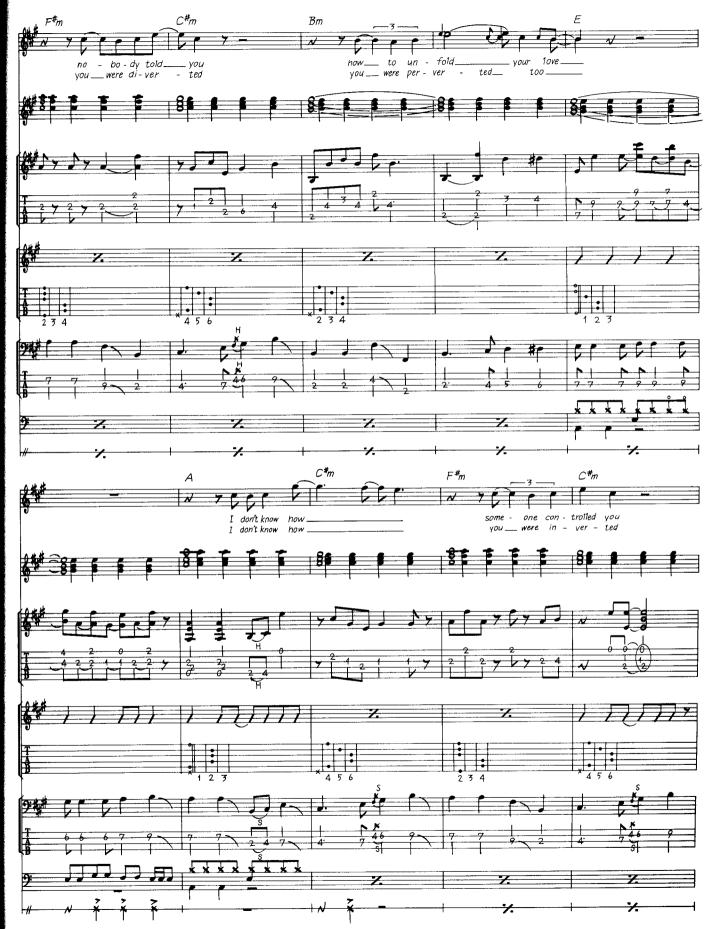
Authorized for sale only in Japan.





















Yeah. Yeah_ 42

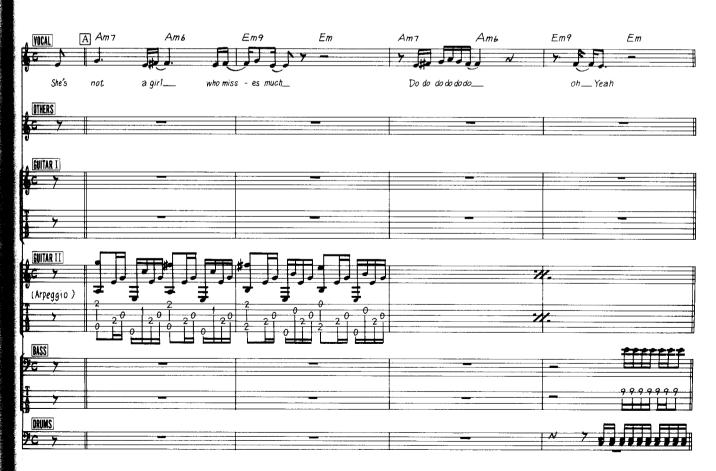
HAPPINESS IS A WARM GUN

ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ジョンが銃で撃たれた事を考えると涙なくしては聴けない曲。 図のギターII はアルペジオで、 図の1、2 小節目にあるよう 26th、7 thの音を自然なアルペジオの中にうまく取り入れて、コード・ハーモニーをリードしている。 図から出てくるギター I はコード・カッティングであるが、1 拍きちんと伸ばす音と、切る音をしつかり変化させなければならない。 図のギター・ソロは、5、6弦のみを使い、それにフィンガー・テクニックを加味して作りたフレーズ。 低音弦のために、チョーキングは6弦方向にしないで1弦方向(つまり下)にするとよい。 図の2~3 小節目にかけての1音半チョーキングはポルタメントでゆっくりと。 回はペースとのユニゾン・リフ。ベースは図ではハネ気味に、 回からは落ち着いたニュアンスでプレイしたい。 ドラムスはテンポ・チェンジする前(回まで)はノーマルな8ビート。 フィル・イン

前にハイハット・オープンとなるのが特長。②は細かく8分音符を刻まないで、1拍3連のとり方で大きくのることが大切である。 匠のハイハットはダビング。ハイライトは③で、他の楽器は $\frac{12}{8}$ でとっているのにドラムスは $\frac{4}{4}$ で叩いていることである。だから歌を聴いているとスネアとバス・ドラムが妙な位置に入ってくるな、という感じがする。 $\frac{12}{8} \times 3$ 小節で $\frac{36}{8}$ 、つまり $\frac{4}{4}$ で数えると4小節と $\frac{2}{4}$ 1小節になる。だから結果的につじつまが合っているわけである。この曲に関しては変拍子を意識することなく、歌のメロディを覚えてしまえば、自然に演奏できるようになる。ほとんどリピート・マークもつかず次から次へと構成が変わっていくこの曲は、いってみれば組曲のようなもの。譜面にしてみて初めてこの曲の偉大さがわかった次第である。

















MARTHA MY DEAR

マーサ・マイ・ディア

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

メロディ・メーカー、ポールガバロック的雰囲気を加味して作った曲。それだけに他の曲と違った試みがたくさん見受けられる。イントロはピアノにより、メロディが打ち出される。そして次に関けらはポーカルとストリングスがユニゾンでかぶってくる。いかが応にも主施律が表面に出てくるようになっている。国でリズムをリードするのはストリングスとピアノの8分カッティング。ここでピアノの低音部に書いてある音でチューバが加わり、ベース・ラインをも浮き出すようにしている。図からは倍のテンポに変化したようになり、ドラムも2ビートぼく入ってくる。ギターのカッティングもここから加わってくるが、他の楽器がキッチリと決まったフレーズを展開しているので、ギターでラフなニュア

ンスを出している。ベースもここではリズムはハネ気味で×点で書いてあるミュートの意味をノリの1つと解釈して弾いてみよう。8分音符もスタカートでプレイするといい。回はブラスの間奏となっているが、ここでまた面白いリズムが出ている。ドラムスとハンドクラップが、4という拍子が入っているにもかかわらず4のアクセントで通していることである。これも4小節のブレイクで解消することになるが、時々リズムをゴリ押しすることがあるので、まったく目が離せない。回の2×はブラスによるオブリガートが入ってくる。これは大事に取り入れたい。ピアノを中心に、ストリングス、ブラスのアンサンブルにかかっている曲なので、楽器の割り振りに工夫をこらしてみてほしい。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only

















アイム・ソー・タイアード

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ジョンのけだるい感じがよく出ている曲。ギターは I、IIともにリズムを出しているにとどまっている。I はディストーション・サウンドで、静かな回は後半にカッティングが出てくるのみ。 E からはロックンロールのパターン。ただしテンポが遅いのでちょっとこのフレーズの持つ意味とは違った風に表現している。 シリを重くすることが第一条件。ギターII はどちらかというとフロント・ピックアップを使用しているような甘い音。だから回のカッティングのリズムが細かくても、あまり前面に出てくるような事がないわけだ。 B はギター I とまったく同じである。違う音色のギターによるダブル録音効果が狙いだ。ベースは珍しく遊びのないベーシックなプレイに終始している。 E の 5 小節目の A 音へのパッシングはフレーズは簡単だが、他の楽器をリードするぐらいインパクトの強いもの。 2 カッコからオルガンがはいってくるが、

単音、あるいは多くて 2 和音のハーモニーで動きのあるフレーズを使っている。イメージとしてはストリングスを頭に描いてあるはずだ。回からは 3 和音のハーモニーで、ギターで追えなかった分を補っている。回からうすくアコースティック・ピアノもはいってきて、 5 小節目は16分弾きとなる。ここで面白いのは、他の楽器が完全ブレイクしているコーダの 1、 3、 5 小節目に低音部の音を残していること。ちょっと理解に苦しむところだ。コード進行についてだが、 \triangle の 1 小節目、3、 4 拍の G^{\sharp} 7 はハッとさせられる。 5 小節目のEausも同じ理由から気になる存在。前者ではベース音($A \rightarrow G^{\sharp}$)、後者はハーモニーのトップ音 ($C^{\sharp} \rightarrow C$) の半音進行が、どちらもいかしている。やはりどの曲にもピリッと辛みをきかせているところはさすがである。



(C) Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only







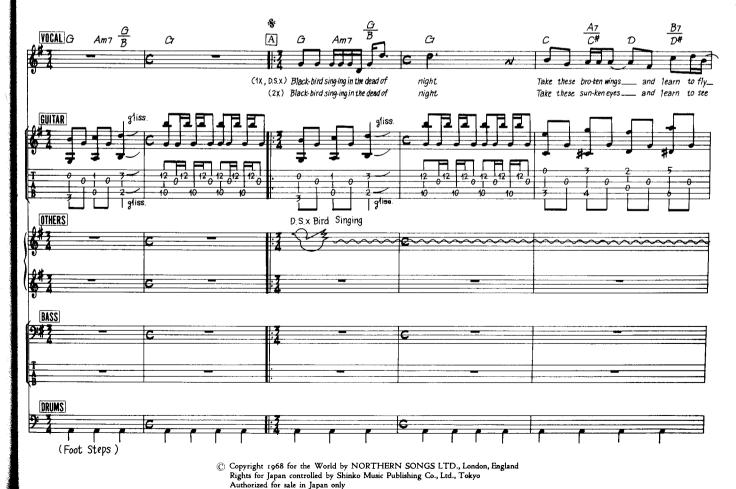
BLACKBIRD

ブラックバード

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ポールの弾き語りによる曲。ジョンとジョージは不参加。まずこの曲の唯一のバッキングであるアコースティック・ギターの奏法について説明しよう。タブ譜を見てわかる通り、押さえ方、運指等に難しいところはまったくない。だからこのバッキングの特長をよく把握してから取りかかるとマスターが速いと思う。まず基本的なハーモニーは2和音によるものである。そして、その2和音を押さえた後に必ず3弦開放Gの音がはいるということ。親指でピッキングするベース音はルートの音をとっている、とっていないは別として、ラインがパターン化されているということ。あとはトップの音の動きを、先に譜面で見て単音でとっておくとわかりやすい。1小節目から2小節目にかけてはフレットが飛ぶが、1拍問があるので落ち着いて10フレットまで持っていくこと。

2小節目は同じG音でも5弦10フレットと3弦開放がある。響きの違いに注目したい。回の1小節目、F→Bbまでルートが落ちてくるが、2弦と5弦のフレットがすべて同間隔で降りてくるわけではないので、気を付けなければならない。コーダの1小節目、回の7小節目とメロディが同じだが、コードを変化させているのが憎いところ。4分でリズムを刻んでいるのは、床を靴で踏み鳴らす音。鳥のさえずりが回の2カッコ、一度ポーズになったところから流れてくる。S.E.として使用すれば、気分が盛り上がってきて、演奏にもいい影響が出るはずだ。この曲の性格上、ギターをマスターしたら、弾き語りでプレイするのが最上の方法だと思う。













PIGGIES

ビッギーズ

Words & Music by George Harrison

い。ハープシコードは回の1カッコ、2カッコなどのフレーズはオクターブでプレイすると厚みが出てくる。やはりメインは回の間奏。ところが実際弾いてみると、下の音がスティしているので、音が細かいわりには簡単に弾ける。ハープシコードの場合、その音色だけで存在感を作ってしまうので、これで十分なのである。ストリングス・アンサンブルは、コントラバス、ハープシコードのハーモニー補佐と考えればよい。ギターは1カポでプレイしている。これによりポジションは非常に楽になっている。D.S.後3番のボーカルはオペラ歌唱法によるもの。大勢で歌うと雰囲気が出てくる。3番のみコード・ハーモニーのルート音による低音パート・コーラスがはいっているので、聴いてみてほしい。エンディングの2小節でキーがAに変わっているのも風変わりなアレンジである。



© 1968, 1981 by HARRISONGS LTD. Assigned for Japan to TAIYO MUSIC, INC. Authorized for sale only in Japan.











ROCKY RACCOON

ロッキー・ラックーン

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ボールの弾き語り風力ントリー・ナンバー。囚の最初の部分は 音程のないほとんどトークのようなもので、日本人にはちょっと 消化できない語呂だ。囚、回はアコースティック・ギター1本の 弾き語り(回の2×からハイハットが入るが)によるもの。といっても歌と同時にプレイするのは難しい。ギターは淡々とカッティングしているが、ボーカルのリズムはとても複雑だからだ。カッティングの1、3拍目にはルート音を強目に入れておこう。ベースがはいってくるまでは、これが音程、リズムをリードする重要なポイントと言える。回からはベースがはいっているが、音色に変化をつけてあって、トレモロがかかっているのである。おそらくトレモロのついているフェンダー系ギター・アンプにつないで銀音されていると思う。そういえば音がちょっと歪んでいる。スピードはそれほど速くしないでデプスを大きくとればこのよう な音になる。②の1×と、②のD.S.×に出てくるサウンドだ。オブリガートで登場してくるのがハーモニカ。名手ジョンがプレイしているが、ここでは3度の和音のものが中心。ブルースよりもフォークに近いフレーズだ。②の2小節目から出てくるのはアコーディオン。フレーズはそれほど目立たないが、楽器をおしみなく使用するラグタイム・バンドの雰囲気を狙っているようだ。D.S.×の巨の1小節前からコーラスが出てくるが、これも変化を強調していて楽しい。回のホンキートンク・ピアノは、トリルをしっかりプレイすると似た感じになる。ホンキートンク・ピアノが手にはいらなければ2音源のシンセサイザーの音程をデチューンさせてミックスさせれば近いサウンドになる。リバーブも多少かけるといいと思う。













D % (Straight)

Am7

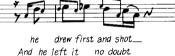
she and her man.

Roc-ky burst__ in __ Roc - ky Rac-coon_

D.S.XY D.S.X with tremolo)

Dani- el was hot

Gide-on checked out



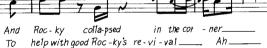
Dsus4

Dsus4

who called him-self Dan.

and grin - ning a grin _____ he fell back in his room ____

 \mathcal{D}



Oh Yeah_Yeah

<u>C</u> B





G7

G7

Were in the next_room__ at the down He said Dan-ny boy_ this__ is a show-down on - ly to find __ Gid-eon's bi - ble

С

(Chorus) D.S. X





DON'T PASS ME BY

ドント・バス・ミー・バイ

Words & Music by Richard Starkey

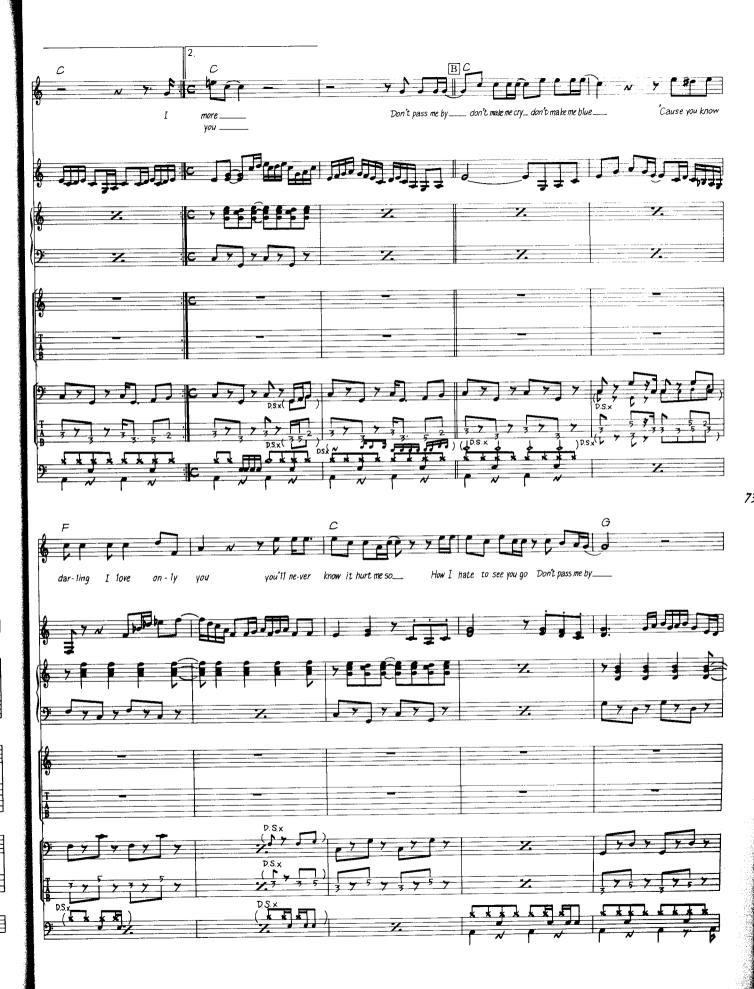
リンゴ初の単独作。彼得意のカントリー&ウエスタン・ナンバー。この曲にはギターははいっていなくて、ハーモニーを出しているメイン楽器はエレクトリック・ピアノである。なんとリンゴが自分で弾いている。単純なリフであるが、さすがにリズムはバッチリきまっている。イントロの2小節はフリー・テンポ。コードCのバッキングの時だけトップ音が動くと思えばいい。自分の曲だけに、ドラムスも張り切っている。ベーシックなフレーズの他にバスタムをダビングしてあるのである。ここでは2拍以上のフレーズを書いておいたが、実際はいろんなところにはいっているので、レコードをよく聴いてほしい。スネアも16分音符を多用してアクセントに変化をつけている。16ビートのフィル・インは

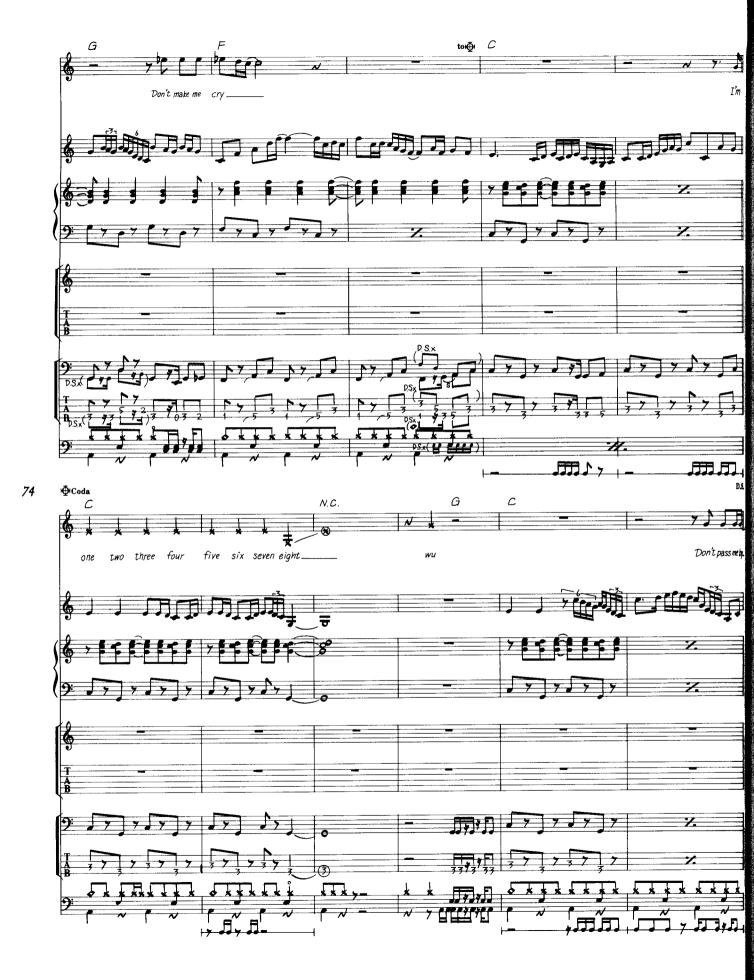
リズムガハネているので注意。イントロの3小節目などのスネアの音色を聴くと、ゲート・リバーブがかかったような音で、これも当時としては画期的なものだといえる。オブリガートはフィドルが担当。これは囚の1カッコから最後までずっと続いている。したがってフレーズよりもフィーリングが重視されるというわけだ。譜面に書いてあるのは、ほとんど単音だが、特に長目の音符の時に4度違う音を異弦でからめて弾くとフィドル独得のニュアンスが出てくる。エンディングでは4小節ほどソロが出てくる。リズムは16分音符ではドラムスと同じようにハネ気味で弾くこと。ほのぼのとした雰囲気が出るようになるまでリラックスして演奏できるかが、この曲のポイントである。



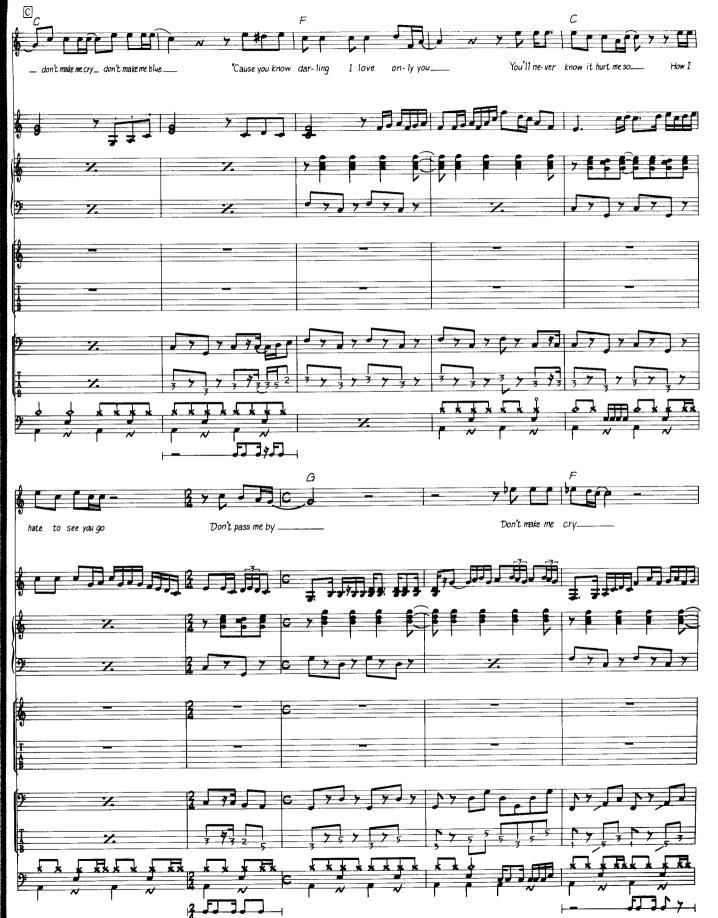
© 1968 by STARTLING MUSIC LTD.
Assigned for Japan to EATON MUSIC (JAPAN) LTD.
Authorized for sale only in Japan.













WHY DON'T WE DO IT IN THE ROAD

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ポールの好きなお遊び的ワンマン・バンド・プレイによる曲。 12小節のブルース進行のナンバーで、歌詩はほとんどタイトルを くり返しているだけというものだ。2カッコの2小節目からファ ルセットのハイトーンに移り、3コーラス目はボーカルガフェイ クする形になっている。ベースは8ビート・プレイに専念。コー ドの移り変わりに回の9~10小節のように半音進行のパッシング・ ノートを入れる程度。ただし3×はボーカルが盛り上がっていく と同時にベースも動き始めている。この辺の対応はさすがにボー カリスト&ベーシストのなせる技といえる。 🖾の2、3小節目は オクターブをうまく使ったランニングだ。ドラムスはイントロの みブラシ・プレイ。A前の1小節のブレイクでスティックに持ち

換えるといい。スネアのフィル・インはやはりリンゴの持ち味が しっかり出ていて、ハネ気味のリズムになっている。3カッコの エンディングはクラッシュ・シンバルではなくて、ハイハット・ オープンを伸ばしているという変わった締めくくりである。ピア ノは8分弾きで、ポールが弾いている。音域は低いところだが、 うまく7thの音を混ぜている。何といっても唯一のハーモニー楽 器だから、しっかり押さえたい。ギターはフロント・ピックアッ プを使った甘い音で、アルペジオ・スタイル。タブ譜を見てポジ ションを覚えてしまえば、ごく簡単なもの。コード・チェンジの 時に、下からのスライドを多用して、なめらかさを出している。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only







アイ・ウィル

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

美しいメロディを持ったシンプルなラブ・バラード。エレクトリック楽器を一切使用しないアコースティックな響きが新鮮である。ベースはポールのスキャット・ベースで、これがいい味を出している。もちろんダブル録音である。現在の機材を使用するなら、スキャット・ベースをサンプリングすれば〇ド。この時に軽いビブラートをつけておくといい。やはりアンサンブルを考えたらこの方法がベストだと思う。実際演奏すると、レコーディング以外では低音ハーモニーは埋もれてしまうからだ。それにしても △の1×の1小節目3拍目のD音は低過ぎる。この部分はおそらくテープ操作があったのではないかと思われる。ギターIは12弦で、オブリガート専門。△の1カッコ、2カッコはスピード感を

伴っていることが第一条件。それとフレーズが微妙に違っているので注意したい。2カッコのフレーズはコードBbへのアプローチを完全に表現している。回の4小節目も同じ。回の1、2小節は2弦4フレットがちょっと遠いので指をちゃんと開かないと愛くことはできない。その他は単音弾きなので、大事に弾けば全く問題ない。ギターIIは最初から最後まで8ビート・カッティングをプレイしている。コーダの1~3小節目に小さいリズム・セクションがあるが、これも合わせなくていい。ドラムスははいっていないので、リム・ショットのリズムがメイン。回からボンゴとシェイカーが加わってくる。ボンゴのリズムはちょっと細かいので、バランスは小さ目でよいだろう。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only











JULIA TULIA

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ジョンの弾き語りによる、ヨーコに捧げたフォーク・バラード。 図の1×に出て来るOcean Childとはジョンの造語で、洋子を ストレートに英訳したものであるのは、あまりにも有名。バッキ ングはアコースティック・ギターのアルペジオのみ。 囚はこの譜 面通り1本であるが、 図からはもう1本はいってくる。 ただし全 く同じプレイをしているので問題はないと思う。 2カポ・プレイ なのでキーは○となる。 カポをしても図ではバー・コードがどう しても出てしまうので、キチンと押さえないと音がとぎれてしま うので注意。コード進行もひねりをきかせてあって、国の部分が面白い。4小節目の1、2拍目が9thを入れたメジャーで3、4拍目でマイナーになるのはちょっと聴き流しただけではコピーできない。②のC*mもサビの頭としては変わっている。美しいのは②の3、4、5小節目のトップの動き、思わず弾いていて武者震いが起きてきそうな感じだ。ジョン以外は不参加というこの曲は、ジョンの気持ちが素直に伝わってくる佳曲といえよう。











BIRTHDAY

バースデー

Words & Music by John Lennon and Paul McCartney

ブルース形式のハード・ロック。イントロ1小節目から出てくるギターIとベースのリフがこの曲のポイントとなっている。これがカッコよくキマらないと、成立しないような曲だ。ギターは2拍目のスライドと3拍目のハーフ・チョーキングをうまく表現しなければならない。特にチョーキングは半音なので上がり過ぎないように注意。またスピーディにすることによって、チョーキングのニュアンスを殺すことも必要。ベースは何のテクニックも使わずにリフを表現するだけ。ただしギターが休んでいる偶数小節も用じフレーズを弾いているので気を抜くとコケてしまうので、がッツがいる。ギターIIはどういうわけカユニゾンではなく3、4拍目の音をルート音でステイしている。だからよく聴くと変わ

つたハーモニーになっていることがわかる。 \square は 2 小節パターンのリフ。これはベース・ラインから先に考えたものであろう。 $8\sim 9$ 小節目の半音進行も 9 小節の ${}^{\pm}_{}^{\pm}$ のコードを見ると納得できる。 2 カッコの 4 小節は独立したリフ。あえてコード・ネームを付けるとしたら A_7 といったところか。 ピアノはポールが弾いていて、ギター I のリフの合いの手となっているリピート後のイントロ部分が間奏と思ってもらえばいい。 \square のオルガンはジョンが弾いていると思われる。 3、5、7 小節目の女性コーラスはヨーコと当時ジョージの奥様であったパティによるもの。 とにかくこの曲はリフの合作でできているようなものだから、そのあたりから集中的に攻めるのが得策である。



© Copyright 1968 for the World by NORTHERN SONGS LTD., London, England Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only















THE BEATLES

P25-5329 · :

BACK IN THE U.S.S.R. DEAR PRUDENCE GLASS ONION OB-LA-DI, OB-LA-DA WILD HONEY PIE THE CONTINUING STORY OF BUNGALOW BILL.
WHILE MY GUITAR GENTLY WEERS HAPPINESS IS A WARM GUNN MARTHA MY DEAR I'M SO TIRED BLACKBIRD PIGGIES ROCKY PACCOON DON'T PASS ME BY
WHY DON'T WE DO IT IN THE ROAD I WILL. JULIA BIRTHDAY YER BILLES MOTHER NATURE'S SON E VERTWOODY'S GOT SOMETHING TO HIDE EXCEPT ME AND MY MONKEY
SEXY SADIE HELTER SKELTER LONG LONG REVOLUTION NO.1 HONEY PIE SAVOY TRUFFLE CRY BABY CRY GOOD NIGHT

The BEATLES

"THE BEATLES"

